

特集 特別企画展「吹上の考古学史をたどる」

今田遺跡（吹上高等学校テニスコート）出土土器の報告

鐘ヶ江 賢二¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

1. はじめに

本報告書中の拙稿「文化財の調査研究における高校生のフィールドワークの可能性」でも触れたように、鹿児島県立吹上高等学校の社会研究部の部員が積極的にフィールドワークを展開し、吹上や金峰町（現南さつま市）周辺の遺跡を発見し大きな成果を挙げたことは、現在の文化財の保存と活用における地域住民、特に若年層の役割の重要性や可能性を示すものとして注目される。こうした成果が礎となり、後の吹上全体の文化財調査の進展につながっていくわけであるが、地域住民による遺跡の発見や調査は、文化財の調査研究と保存を後の世代に継承するためにも、意義のある活動であると考えられる。

吹上高等学校社会研究部部員によって発見された遺跡および採集品には、学史上重要な位置づけを与えうる資料も多く存在する。特に当時の高校生にとって活動の刺激的だったのは、自らの高校から遺跡が発見されたことであろう。

1967(昭和42)年に刊行された部誌『ふきあげ』によると、昭和41年6月8日、当時の部員であった山口邦昭氏が、吹上高等学校のテニスコートから土器を発見したことが報告されている（山口1967）。吹上高等学校テニスコートからは、弥生時代前期を中心とする土器片に加えて縄文土器も採集されたが、特に弥生時代前期の高橋Ⅱ式に相当する完形に近い甕形土器2点が出土したことが強調され、部の評価にもつながる画期的な発見であったことが部誌につづられている。当時南九州では、南さつま市金峰町の高橋貝塚を除いて出土例が少なかった弥生時代前期の土器が、テニスコートから完形に近い状態で発見されたことは、当時の高校生にとって大いに刺激的で、部員の活動に対する自信、士気の高まりにつながっただろう。

遺物が発見された吹上高等学校テニスコートは、今田遺



図1 遺跡の位置 1：辻堂原（花熟里）遺跡 2：今田遺跡 3：入来遺跡
(国土地理院電子地図を改変)

跡と称されることとなったが、今田遺跡から出土した主要な遺物は、鹿児島国際大学博物館実習施設に収蔵されている。今田遺跡の完形に近い甕形土器1点は、当時の部の顧問であった上村俊雄氏によって報告がなされ（上村1986）、図示されている。しかしながら、他の遺物については図示されておらず、遺構図なども公表されていないため、遺跡の全容については不明な点も多い。

そこで、本稿では本施設に収蔵されている遺物のうち、土器資料について主要なものを図化し、提示することで、今田遺跡の特質や意義の理解につなげるための一助としたい。なお土器の編年観は中園聡氏による編年（中園1997）に従う。

2. 今田遺跡出土土器の概要

本施設に収蔵されている今田遺跡出土土器は、弥生土器が中心となるが、1～3のように縄文土器も一部含まれる。1は外面に縄文が施されるが時期は判然としない。2と3は後期の指宿式の口縁部片である。

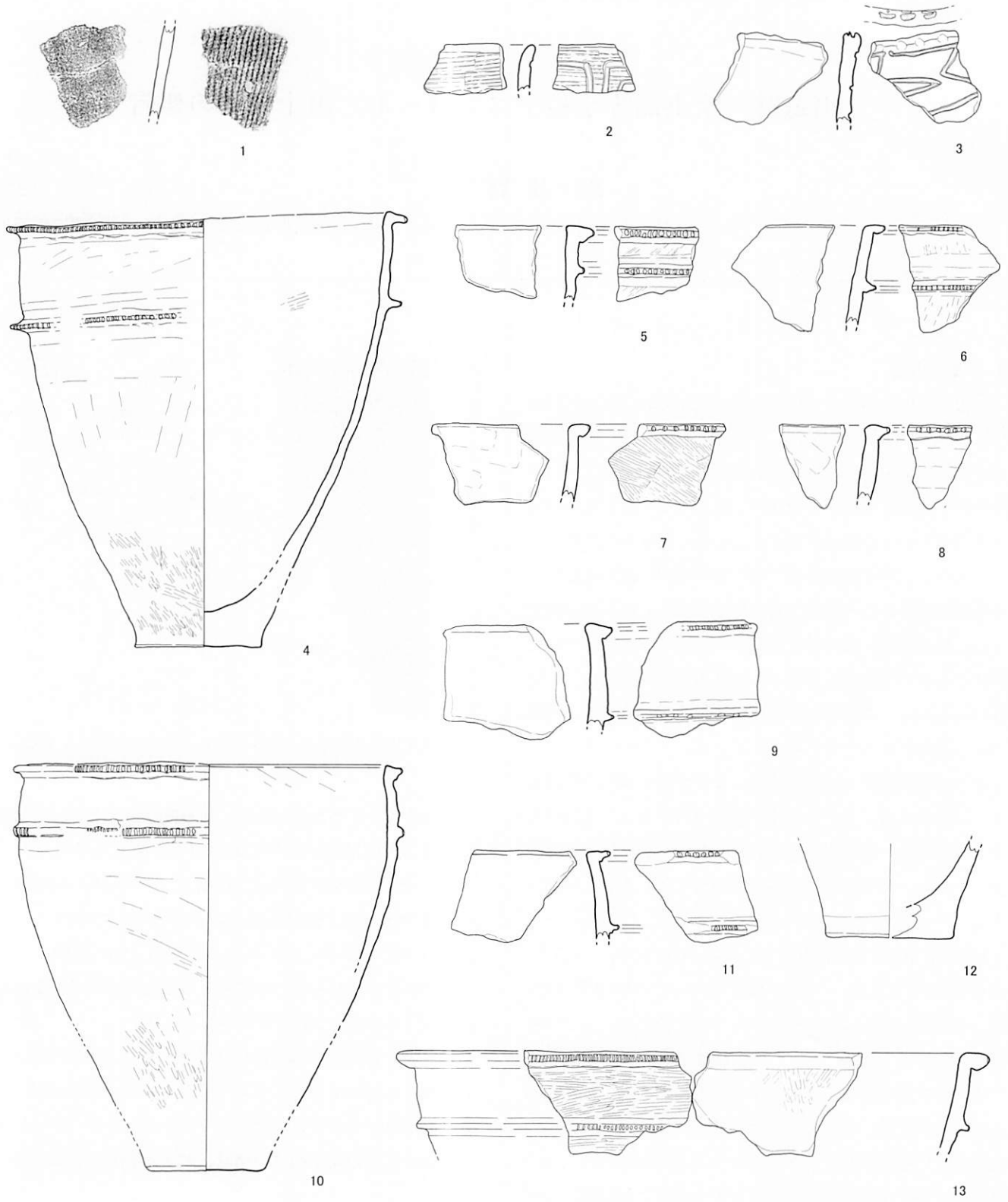


図2 今田（吹上高等学校テニスコート）遺跡出土土器実測図（S=1/4）

0 10cm

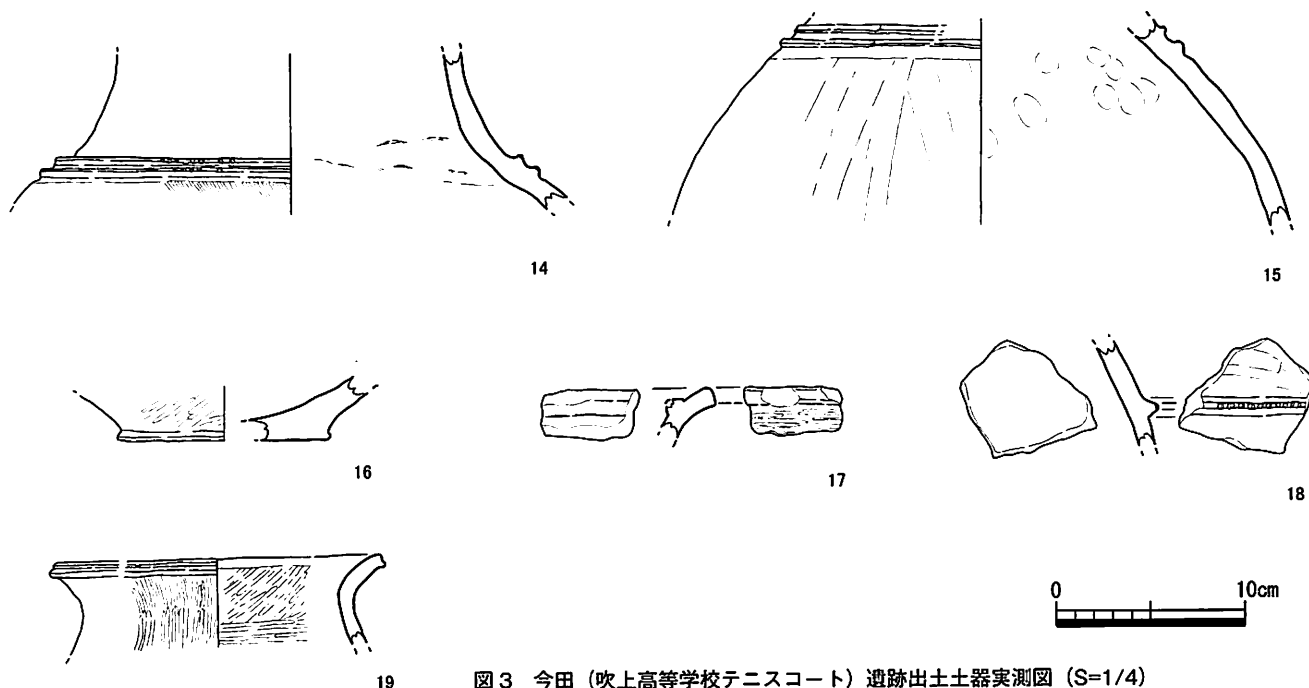


図3 今田（吹上高等学校テニスコート）遺跡出土土器実測図（S=1/4）

資料の主体をなす弥生時代前期の甕形土器は、高橋貝塚出土土器に代表される九州南部の弥生前期に特徴的な形態を呈しており、いずれも刻目突帯文土器の系譜をたどることができるものである。甕の口縁部突帯の形状は、断面三角形を呈するものが多く、刻みも浅いことから、前期後半から末葉の高橋Ⅱ式の特徴を示すと考えられる。完形に近い4と10は、口縁部と胴上部に二条突帯をめぐらし、浅い刻みを施す。外面は全体的にナデによる仕上げが確認できるが、外面下半部はミガキによる仕上げが認められる点が特徴的である。4は外面にススの付着がみられ、内面にも底部付近にコゲが付着する。10は、大部分が石膏で下半部が復元されており、下半部の器壁の計測はできていない。甕の破片は、口縁部付近が残存した資料を図示しており、外面はナデで仕上げられるものが多いが、7ではハケメが確認できる。

甕以外の器種をみると、13は鉢で、反転復元し図化した。口縁部は断面三角形で浅い刻みを施し、外面および内面は全体にミガキで調整されている。高橋Ⅱ式に相当すると考えられる。壺は、甕に比べると数が少なく、高橋Ⅰ式あるいは高橋Ⅱ式に相当するものは、16の底部破片とみられる。壺の14と15は頸部と胴部の境付近に突帯がめぐり、14は断面三角形の突帯で、浅い刻みを施す。15は、断面方形の突帯で、刻みはみられない。14は中期前半の incomingⅠ式、15は中期前半から中葉の incomingⅠあるいはⅡ式

か。17と18は、肥後地方の黒髪式系の壺と推測される。19は、口唇部の中央に窪みが認められ凹線状を呈する特徴から、北部九州中期後半の須玖式やその影響を受けた壺とみられ、全体にミガキが施される。

3. まとめ

本稿では、本施設で収蔵されている今田遺跡出土土器の報告を行った。一部縄文土器も含まれるが、土器の主体をなすのは弥生時代前期後半から末葉の高橋Ⅱ式で、壺は前期後半から中期後半の時期幅を示している。完形に近い甕2点は、高橋貝塚出土土器と並び当該地域の弥生時代前期土器の基準となりうる貴重な資料と評価できよう。また壺には肥後地方の黒髪式や北部九州の影響を示すものも含まれ、交流の一端をうかがうことができる。石器等本稿では図化できなかった資料も一部残されているため、整理作業を進め、今田遺跡の全容に少しでも迫るよう努めたい。

なお、本稿での遺物の図化に際しては、吹上高等学校テニスコートから遺物が発見された当時の社会研究部顧問であった上村俊雄氏（鹿児島国際大学前教授）に承諾をいただいた。遺物の写真撮影では、大西智和氏（鹿児島国際大学国際文化学部）にご協力いただいた。末筆ながらお礼申し上げます。



図4 今田遺跡出土土器写真（主要なものを抽出）

文献

上村俊雄 1986「鹿児島県今田遺跡出土の弥生土器」『鹿児島大学考古学会会報』第3号

中園 聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号

山口邦昭 1967「発掘報告（テニスコート）」『ふきあげ』第5号